

はしがき

本書は、奈良時代から文明年間頃（正徹の『草根集』を下限とする）までの文学作品に用いられている、いわゆる文語文（古典文、古文）の文法について、包括的に記述し、もって古典文法（文語文法）の種々相について常に参照できる文法書（reference grammar）であることを目指したものである。

本書の特色は、次の通りである。

1. 従来の品詞別、助動詞・助詞別の記述を廃し、現代日本語文法書や英文法書などで行われている文法記述の枠組みを採用したこと
2. 従来あまり用いられて来なかった、私家集、歌合、定数歌などの古典和歌から積極的に挙例したこと
3. 珍しい句型についても、できるだけ詳しく記述したこと
4. 従来の文法書や辞書で触れられていない様々な表現形式をあげたこと
5. ある句型がどのように解釈されるかを明確に述べ、古典解釈辞典の機能ももたせたこと
6. 構文の種々相にも詳しい解説を与えたこと
7. 現代語文法で話題となる、「数量詞移動」、「形容詞移動」、「否定繰上げ」といった言語現象の古典語の実例に、容易にアクセスできること
8. 近年の研究成果を積極的に取り入れ、その依拠文献を明示したこと

本書は前著『古典文法詳説』（おうふう 2010年9月刊）をもとに、内容を大幅に増補・改訂したものである。本書が古典読解上・文法研究上のレファレンスとして、少しでもお役に立てるなら、幸いである。

2014年7月 岐阜にて

小田 勝

凡例

1. 用例の出典は略称を用い（ ）内に表示した。出典の正式名称および依拠テキストは、巻末の「用例出典一覧」に掲示した。
2. 用例の表記は私に改めた。多くは単なる表記上の改変であるが、中には、百人一首の「契りきなかたみに袖をしほりつつ」のように、解釈に関わって意図的に表記を改変したところもある。文脈を分かりやすくするための主語・客語・その他の状況説明は用例中に〔 〕で囲んで示し、意味の分かりにくい語句については該当する語句の直下に（= ）の形で現代語訳や説明を示した。用例の一部を省略する場合、省略した部分を「…」を用いて示した。
3. 用例の前の「*」印は、その例が文法的に不適格であることを示す。用例中の「φ」は、そこに語彙項目が無いことを示す。
4. 出典には巻数・段数を洋数字で示した。説話集で「2-13」などとあるのは「第2巻第13話」の意である。『枕草子』は新日本古典文学大系の段数番号を用いて、「枕3」のように表示した。『記紀歌謡』『万葉集』および勅撰集には歌番号を依拠テキストにより付した。勅撰集所載歌のうち定家の百人一首に採られている歌は、原典ではなく「百」と表示し、百人一首の歌番号を示した。
5. 語の用例数を示す際は、既刊の諸索引類および『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』（角川書店刊）の検索結果を使用したところがある。
6. 本文中の◆は補足説明を表す。
7. 本文中の「 (§1.2) 」は「第1.2節に関連する記述がある」の意、「(→§1.2) 」は「第1.2節を参照せよ」の意を表す。
8. 用例の後に「(左馬頭→源氏)」とあるのは、「左馬頭の、源氏に対する詞」の意を表す。
9. 本文中で、日本古典文学大系（岩波書店刊）を「大系」、新日本古典文学大系（岩波書店刊）を「新大系」、新編日本古典文学全集（小学館）を「新全集」と略称した。

目次

はしがき	i
凡例	ii
第1章 序論	1
1.1 古典文法	1
1.2 形態論と構文論	3
1.3 五十音図	4
1.4 歴史的仮名遣い	5
1.5 古文の音読のしかた	7
1.6 文の基本構成	8
1.7 品詞	10
1.7.1 10品詞	10
1.7.2 助詞	13
1.7.3 助詞の相互承接	14
1.7.4 助動詞	16
1.7.5 品詞の非定位	16
1.8 語の構造	17
1.8.1 接辞	17
1.8.2 複合語	19
1.8.3 句の包摂	20
1.9 音の縮約	21
1.10 上代特殊仮名遣い	22
1.11 文法の史的変化について	24
第2章 動詞	27
2.1 動詞の活用	27
2.2 動詞の活用型	28
2.2.1 母音交替による活用	28
2.2.2 接辞付加による活用	29
2.2.3 母音交替と接辞付加の混合による活用	31
2.2.4 動詞の活用の種類	34
2.2.5 ハ行・ヤ行の混淆	34
2.2.6 活用型の変化	35
2.2.7 複数の活用型にまたがる動詞	35
2.2.8 動詞化	36
2.2.8.1 名詞の動詞化	36
2.2.8.2 形容詞・形容動詞・副詞の動詞化	37
2.2.8.3 動詞を作る接尾辞	37
2.3 音便	39
2.3.1 イ音便	39
2.3.2 ウ音便	40
2.3.3 撥音便	40
2.3.4 促音便	41
2.4 動詞の自他	41
2.4.1 自他の対応	41
2.4.2 複他動詞	45
2.4.3 ～を+自動詞	47
2.4.4 接尾辞「かす」	48
2.5 意志動詞・無意志動詞	48
2.5.1 動詞の意志性	48
2.5.2 意志的他動詞と自然的他動詞	49
2.6 動詞の格支配	49
2.6.1 同族目的語	50
2.6.2 同じ格の並置	51
2.6.3 「に」格も「を」格もとる動詞	52
2.6.4 現代語と格支配の異なる動詞	53
2.6.5 複合動詞の格支配	54

2.7 補助用言	54	2.11 動詞の連続形式	61
2.7.1 補助動詞	54	2.12 動詞の強調形	63
2.7.2 補助形容詞	55	2.12.1 動詞+に+動詞	63
2.8 代動詞	56	2.12.2 ただ+動詞+に+動詞	64
2.9 軽動詞	58	2.12.3 動詞+と+動詞	65
2.10 複合動詞	59	2.12.4 動詞+し+動詞+ば	66

第3章 述語の構造……………67

3.1 助動詞	67	3.2.2 XはYなり	81
3.1.1 助動詞の分類	68	3.2.3 活用語を受ける「なり」	82
3.1.2 助動詞の相互承接順序	69	3.2.4 助詞・副詞を受ける「なり」	83
3.1.2.1 相互承接に両様存する助動詞	71	3.2.5 にてあり・たり	84
3.1.2.2 僅少な相互承接例	72	3.3 比況	85
3.1.2.3 相互承接の違例	74	3.4 喚体句	87
3.1.3 表現性による助動詞分類	74	3.4.1 名詞+や	89
3.1.3.1 助動詞の2類	74	3.4.1.1 形容詞語幹+の+名詞+や	89
3.1.3.2 2類にまたがる助動詞	75	3.4.1.2 あな+名詞+や	89
3.1.4 接続句の制約と助動詞	75	3.4.2 擬喚述法(連体形終止)	90
3.2 名詞述語文	78	3.4.3 不完体の句	91
3.2.1 指定辞	78	3.5 已然形終止	92

第4章 ヴォイス……………94

4.1 ヴォイス	94	4.3.8 ゆ／らゆ	110
4.2 受動態	94	4.3.9 かつ	110
4.2.1 直接受身文	94	4.3.10 かぬ	111
4.2.2 間接受身文	95	4.3.11 その他の不可能を表す表現	111
4.2.3 非情の受身	97	4.4 使役態	112
4.2.4 受身文と他動詞・使役と同意	98	4.4.1 使役態	112
4.3 可能態・自発態	100	4.4.2 使役の打消形	114
4.3.1 る／らる	100	4.4.3 被使役者の格表示	114
4.3.2 自発の打消形	103	4.4.4 許容の使役	115
4.3.3 「る・らる」の補助動詞に対する位置	103	4.4.5 無意志的な使役の用法	115
4.3.4 動詞+得	104	4.4.6 「す／さす」「しむ」の接続の違例	116
4.3.5 アスペクト形式による可能表現	105	4.5 ヴォイスの重複	118
4.3.6 潜在的可能	105	4.6 ヴォイス形式と表意の齟齬	119
4.3.7 え…ず	106		

第5章 時間表現……………121

5.1 テンス・アスペクト	121	5.4.4 局面動詞	142
5.2 ツ形・ヌ形	126	5.4.5 局面を表す名詞	142
5.2.1 ツ形	126	5.4.6 ふ	143
5.2.2 ヌ形	128	5.4.7 結果の含意	143
5.2.3 「つ」「ぬ」の接続する動詞について	130	5.5 キ形・ケリ形	145
5.2.4 複合時制	133	5.5.1 「き」「けり」の活用と接続	145
5.2.5 状態性述語のツ形・ヌ形	133	5.5.2 直接経験・間接経験について	147
5.2.6 …ぬと思ふ	135	5.5.3 キ形の意味	150
5.2.7 をはんぬ	135	5.5.4 過去の時点における過去	150
5.3 リ形・タリ形	135	5.5.5 特殊なキ形	150
5.4 その他のアスペクト表現	141	5.5.6 ケリ形の意味	152
5.4.1 あり-	141	5.6 現在	155
5.4.2 …をり	141	5.7 未来	155
5.4.3 …つつあり	142	5.8 従属節のテンス	156

第6章 肯定・否定……………159

6.1 肯定判断	159	6.2.5 否定と肯定が同意になる現象	168
6.2 否定判断	161	6.2.6 肯否の誤用	170
6.2.1 ず	161	6.2.7 …ずなりぬ	171
6.2.2 否定のスコープ	164	6.2.8 二重否定	172
6.2.3 対偶中止	166	6.2.9 修辭否定	173
6.2.4 否定繰上げ	167	6.2.10 否定と限定	174

第7章 推定・推量……………175

7.1 法助動詞	175	7.2.3.2 推定伝聞の「なり」と断定「なり」との識別	187
7.2 証拠性	177	7.2.4 視覚に基づく推定	189
7.2.1 様相的推定・論理的推定	178	7.2.5 和歌中の「なり」「めり」	192
7.2.1.1 ベシ	178	7.3 推量	192
7.2.1.2 「ベシ」の接続の違例	179	7.3.1 一般的推量・未実現の事態の推量	192
7.2.1.3 「ベシ」の否定	179	7.3.1.1 む	193
7.2.1.4 「まじ」の接続の違例	181	7.3.1.2 じ	194
7.2.1.5 べらなり	181	7.3.1.3 むず	195
7.2.2 証拠に基づく推定	182	7.3.1.4 やらん	197
7.2.3 聴覚に基づく推定	184	7.3.2 らむ	197
7.2.3.1 終止形接続の助動詞「なり」	184		

7.3.2.1 現在推量	197		210
7.3.2.2 伝聞の「らむ」	200	7.4.4.2.2 後件が「む」「じ」「けむ」	
7.3.2.3 現在推量ではない「らむ」	200		211
7.3.3 けむ	201	7.4.4.2.3 後件が「き」「けり」	211
7.3.3.1 過去推量	201	7.4.4.2.4 後件が感嘆文・疑問文	
7.3.3.2 伝聞の「けむ」	202	・反語・断定	212
7.3.3.3 つらむ	202	7.4.4.3 ましよりは・ましやうに	212
7.3.3.4 ぬらむ	203	7.4.5 通常の仮定条件形式で反実仮	
7.4 反実仮想	203	想を表す例	213
7.4.1 反実仮想の標準形	203	7.4.6 単独の「まし」	213
7.4.2 反実仮想の標準形のバリエー		7.4.6.1 反実仮想の2つの表現意図	214
ション	206		
7.4.3 従属節中の反実仮想形式	208	7.4.6.2 実現不可能なことへの希	
7.4.4 反実仮想形式の特殊型	209	望を表す単独の「まし」	214
7.4.4.1 前件が非標準型	209	7.4.6.3 ためらいを表す単独の	
7.4.4.2 後件が「まし」以外の句型	210	「まし」	215
		7.4.6.4 「む」と同義の「まし」	215
7.4.4.2.1 後件が「べし」「まじ」	210	7.5 確述	216

第8章 当為・意志・勧誘・命令 219

8.1 当為	219	8.4.1 願望表現	233
8.2 意志	220	8.4.1.1 願望表現の句型	233
8.3 勧誘・行為要求表現	222	8.4.1.2 ばや	235
8.3.1 誘い	222	8.4.1.3 まほし・たし	235
8.3.2 勧め・行為要求表現・命令	223	8.4.2 打消された事態に対する願望	
8.3.3 命令形を欠く語	227	表現	237
8.3.4 命令形に対する主語表示	228	8.4.3 希求表現	239
8.3.5 命令形放任法	228	8.4.3.1 なむ	240
8.3.6 禁止	229	8.4.3.2 もがな	240
8.3.6.1 な…そ	229	8.4.4 打消された事態に対する希求	
8.3.6.2 「な…そ」以外の禁止表現	232	表現	242
8.4 希望表現	233	8.4.5 上代の希求表現	243
		8.4.6 希望表現の違例	244

第9章 疑問表現 245

9.1 疑問表現	245	9.2.3 疑問条件節	247
9.2 真偽疑問文	245	9.2.4 否定の真偽疑問文	248
9.2.1 真偽疑問文の基本形式	245	9.2.5 やぞ	248
9.2.2 真偽疑問文形式の違例	247	9.3 補充疑問文	248

9.3.1 補充疑問文の基本形式	248	9.6 疑問を表さない疑問形式	255
9.3.2 係助詞を伴わない補充疑問文		9.6.1 反語	255
の文末形式	249	9.6.1.1 やは・かは	256
9.3.3 多重補充疑問文	251	9.6.1.2 めや	258
9.3.4 補充疑問文と係助詞「や」	251	9.6.1.3 疑問詞…已然形	259
9.3.5 不定語	253	9.6.1.4 …ばこそ	259
9.4 選択疑問文	253	9.6.2 已然形+や	259
9.5 疑いの文	254		

第10章 形容詞と連用修飾 262

10.1 形容詞	262	10.1.9 形容詞の格支配	279
10.1.1 形容詞の語幹	262	10.1.10 形容詞の人称制限	282
10.1.1.1 形容詞語幹の名詞修飾		10.1.11 形容詞の並置	282
用法	262	10.1.12 形容詞の強調形	283
10.1.1.2 形容詞語幹の動詞修飾		10.1.13 難易文	284
用法	262	10.1.14 共感覚表現	284
10.1.1.3 感動の意を表す形容詞		10.2 連用修飾	285
語幹	263	10.2.1 評価誘導	286
10.1.1.4 形容詞語幹の名詞用法	264	10.2.2 判断内容を表す連用修飾	288
10.1.2 ク活用・シク活用	264	10.2.3 結果修飾	290
10.1.3 形容詞の活用	265	10.2.4 時間を表す連用修飾	291
10.1.3.1 形容詞の本活用	265	10.2.5 場所を表す連用修飾	291
10.1.3.2 形容詞の順接仮定表現	267	10.2.6 程度を表す連用修飾	292
10.1.3.3 形容詞の補助活用	269	10.2.7 連用修飾語の位置	292
10.1.4 形容詞連用形の名詞法	271	10.2.8 …なす	293
10.1.5 形容詞終止形の名詞法	271	10.2.9 遅く…待ち遠に…	293
10.1.6 形容詞化	272	10.3 形容動詞	295
10.1.6.1 名詞の形容詞化	272	10.3.1 形容動詞語幹と名詞	295
10.1.6.2 動詞の形容詞化	272	10.3.2 形容動詞の並置	297
10.1.6.3 副詞の形容詞化	273	10.3.3 句による形容動詞語幹	298
10.1.6.4 -じ	273	10.3.4 形容動詞語尾の変形	298
10.1.6.5 -なし	273	10.3.5 形容動詞の音便	299
10.1.6.6 その他の形容詞を作る		10.3.6 形容詞・形容動詞両形をも	
接尾辞	274	つ語	299
10.1.7 形容詞の音便	274	10.3.7 形容動詞を作る接尾辞	300
10.1.8 形容詞の特殊活用	275	10.3.7.1 -げなり	300
10.1.8.1 同じ	275	10.3.7.2 -らなり	301
10.1.8.2 多し	276	10.3.7.3 その他の形容動詞を作る	
10.1.8.3 「-けし」型形容詞	277	接尾辞	302
10.1.8.4 奈良時代の形容詞の活用	279	10.3.8 タリ活用形容動詞	302
		10.4 副詞	303

10.4.1	状態副詞	304
10.4.2	程度副詞	305
10.4.3	陳述副詞	306
10.4.4	副詞の重複使用	308
10.4.5	副詞化	309
10.4.5.1	転成副詞	309
10.4.5.2	二語以上の語句の副詞化	

第11章 名詞句 311

11.1	名詞	311
11.1.1	事物表示と属性表示	311
11.1.2	モノ名詞とデキゴト名詞	312
11.1.3	名詞の換喩的使用	312
11.1.4	選択制限	313
11.1.5	場所名詞・方向名詞	314
11.1.6	情報名詞	315
11.1.7	動作性名詞	316
11.1.8	転成名詞	316
11.1.9	句の名詞への圧縮	317
11.1.10	名詞を作る接尾辞	318
11.1.10.1	-さ	318
11.1.10.2	-み	319
11.2	連体修飾	319
11.2.1	内の関係の連体修飾	319
11.2.2	外の関係の連体修飾	321
11.2.2.1	「～の」「～に対する」 が補われる連体修飾	322
11.2.2.2	判断内容を表す連体修飾	323
11.2.2.3	飛躍のある連体修飾	324
11.2.3	連体修飾語の係りかた	325
11.2.4	形容詞移動	326
11.2.5	連体助詞による連体修飾	328
11.2.5.1	「の」と「が」	328
11.2.5.2	句を受ける「の」	329
11.2.5.3	連用の「の」	330
11.2.5.4	つ・な	332
11.2.6	「の」と格助詞	332
11.2.7	終止形・連用形による連体 修飾	334
11.2.8	連体詞	334

10.4.6	副詞の「-と」語尾、「-に」 語尾	310
10.4.6.1	副詞の「-と」語尾、 「-に」語尾の分出	310
10.4.6.2	…も…に	310

11.3	準体句	336
11.3.1	モノ準体句	336
11.3.1.1	モノ準体句の分類	336
11.3.1.2	消去型モノ準体句	337
11.3.1.3	追加型モノ準体句	338
11.3.1.3.1	助詞「の」「が」に よる追加型モノ準 体句	338
11.3.1.3.2	助詞非表示の追加 型モノ準体句	342
11.3.1.3.3	追加型モノ準体句 の表現性	343
11.3.1.3.4	追加型モノ準体句 と似て非なる句型	346
11.3.1.4	残存型モノ準体句	347
11.3.2	コト準体句	348
11.3.3	ク語法	351
11.3.3.1	ク語法の標準形	351
11.3.3.2	なくに	353
11.3.3.3	ク語法の違例	353
11.3.4	準体助詞	354
11.3.5	句の素材化	355
11.4	複数表示	356
11.4.1	ども	356
11.4.2	たち・ばら・ら	357
11.4.3	複数表示の重出	357
11.4.4	複数名詞	358
11.4.5	量語	358
11.4.6	-がちなり	359
11.4.7	名詞の並立	360
11.4.7.1	名詞の並置	360
11.4.7.2	並立を表す助詞	361

11.4.7.3	名詞の列挙	363
11.4.8	数詞	363
11.4.8.1	数量詞移動	363
11.4.8.2	数詞の使用	365
11.4.8.3	複数名詞が表す人数	365
11.4.8.4	数詞の読みかた	366

第12章 格 367

12.1	格	367
12.2	主格	367
12.2.1	中古における主節中に主格 の「の」「が」が現れる環境	369
12.2.2	中古以前における主節中の 「の／が…終止形」の例	370
12.3	目的格・格助詞「を」	372
12.4	格助詞「に」	375
12.5	格助詞「にて」	381
12.6	格助詞「で」	383
12.7	格助詞「もて」	384
12.8	格助詞「して」	384
12.9	格助詞「へ」	386
12.10	格助詞「と」	387
12.10.1	格助詞「と」の用法	387
12.10.2	とともに	392
12.11	格助詞「より」	392
12.12	格助詞「から」	394
12.13	格の代換	395
12.14	副助詞・係助詞による格助詞 の内包	396
12.15	無助詞名詞	398
12.16	異主語省略構文	402

第13章 とりたて 403

13.1	副助詞	403
13.1.1	副助詞の2類	403
13.1.2	副助詞の生起位置	404
13.1.3	副助詞の相互承接の違例	405
13.1.4	のみ	406
13.1.5	ばかり・まで	407
13.1.5.1	「ばかり」と「まで」	407
13.1.5.2	ばかり	408
13.1.5.3	「ばかり」の接続	408
13.1.5.4	まで	409
13.1.5.5	よりほか	411
13.1.5.6	だみ	412
13.1.6	だに・すら・さへ	412
13.1.6.1	「だに」と「すら」	412
13.1.6.2	さへ	414
13.1.6.3	そら・だも・そへに	416
13.1.6.4	だにあり	417
13.1.6.5	なりとも	417
13.1.7	し・い	418
13.1.7.1	「し」と「い」	418
13.1.7.2	しも	420
13.1.7.3	ばし	422
13.1.8	など	422
13.1.9	がな	423
13.1.10	その他の、特定の事物をと りたてる表現	423
13.1.11	文末要素の副助詞化	424
13.2	は・も	425
13.2.1	主題	425
13.2.2	総主文・分裂文・ウナギ文	427
13.2.2.1	総主文	427
13.2.2.2	分裂文	428
13.2.2.3	ウナギ文	428
13.2.3	対比・強調の「は」	429
13.2.4	も	429
13.2.5	否定文中の「は」「も」	431
13.2.6	疑問詞に付く「は」「も」	431
13.2.7	感嘆文中の「も」	432
13.3	係助詞	432
13.3.1	係り結びと係助詞の2種	432
13.3.2	係助詞の承接順	434
13.4	ぞ・なむ・こそ	435

13.4.1 「ぞ」「なむ」「こそ」の承接成分	435	13.4.3.6 結びの末尾に終助詞を伴う係り結び文	445
13.4.2 「ぞ」「なむ」「こそ」の生起位置	437	13.4.3.7 体言を結びとする係り結び文	446
13.4.3 係り結びの特殊構文	438	13.4.3.8 係り結びの不成立・不整合	446
13.4.3.1 二重の係り	438	13.4.4 「ぞ」「なむ」「こそ」の表現価値	447
13.4.3.2 結びの流れ	440	13.4.5 係り結びの起源	449
13.4.3.3 結びの流れの例外	442	13.4.6 もぞ・もこそ	450
13.4.3.4 引用句中の係助詞に対して引用外部の述語が曲調終止する句型	443	13.4.7 動詞+人ぞ+動詞	455
13.4.3.5 結びの省略	444		

第14章 複文……………456

14.1 条件表現	456	14.1.4.2 と	472
14.1.1 順接確定条件	458	14.1.4.3 とて・ても・ても	473
14.1.1.1 ば(已然形接続)	458	14.1.4.4 むからに	474
14.1.1.2 からに	460	14.1.4.5 までも	474
14.1.1.3 より	462	14.1.4.6 修辭的仮定	475
14.1.2 逆接確定条件	462	14.1.5 反語・推量などを受ける「なれども」「なれば」	475
14.1.2.1 ど・ども	462	14.1.6 疑問条件節	476
14.1.2.2 修辭的確定	462	14.1.7 条件の限定	477
14.1.2.3 も	463	14.1.8 条件句中の条件句	477
14.1.2.4 形式名詞による確定表現	463	14.1.9 条件表現の違例	477
14.1.2.4.1 ゆゑ	463	14.2 接続表現	477
14.1.2.4.2 ものの・ものから・ものを・ものゆゑ	464	14.2.1 て	478
14.1.3 順接仮定条件	466	14.2.2 して	481
14.1.3.1 「ば」による順接仮定条件	466	14.2.3 で	482
14.1.3.2 「む」による順接仮定条件	467	14.2.4 ながら	483
14.1.3.3 「て」「ては」による順接仮定条件	468	14.2.5 つつ	486
14.1.3.4 同語反復仮定	469	14.2.6 なへ(に)	488
14.1.3.5 ずは	470	14.2.7 がてら	489
14.1.3.6 とならば	471	14.2.8 がに	489
14.1.3.7 ことならば	471	14.2.9 に・を	490
14.1.4 逆接仮定条件	472	14.2.10 が	492
14.1.4.1 とも	472	14.2.11 と(順接)	493
		14.3 接続助詞によらない接続表現	494
		14.3.1 連用形中止法	494
		14.3.2 已然形による接続表現	495
		14.3.2.1 こそ…已然形	495

14.3.2.2 「已然形+ば」の意の已然形	497	14.3.9 即時・同時・時間を表す接続表現	507
14.3.2.3 已然形+や	497	14.3.10 や・と	509
14.3.3 終止形による接続表現	498	14.3.11 形式名詞による接続表現	509
14.3.3.1 終止形による句の並立	498	14.3.12 ミ語法	512
14.3.3.2 終止形による条件表現	499	14.3.12.1 原因・理由を表す「…み」	512
14.3.4 終止形の反復、連用形の反復表現	500	14.3.12.1.1 …を…み	512
14.3.5 「つ」「ぬ」「たり」の反復表現	501	14.3.12.1.2 「…を…み」の変形	515
14.3.6 …み…み	502	14.3.12.1.3 …ば…み	515
14.3.7 連体形による接続表現	504	14.3.12.1.4 …み	515
14.3.8 格助詞「の」	506	14.3.12.2 原因・理由を表さない「…み」	516
14.3.8.1 「…で」の意の「の」	506		
14.3.8.2 反戻の「の」	506		

第15章 複合辞……………518

15.1 複合辞	518	15.4 「より+動詞」型複合辞	523
15.2 「と+動詞/形容詞」型複合辞	518	15.5 「を+動詞」型複合辞	523
15.3 「に+動詞」型複合辞	520		

第16章 引用・挿入……………525

16.1 引用	525	16.1.9 引用者の立場からの表現(間接話法)	533
16.1.1 と	525	16.1.10 引用句内の語句が引用外部に係る例	533
16.1.2 文末の「と」	526	16.2 内容補充	534
16.1.3 「と」助詞の非表示	527	16.3 引き歌	536
16.1.4 「と」の直前における判断辞の非表示	528	16.4 挿入句	537
16.1.5 とて	529	16.5 不十分終止	539
16.1.6 とは	530	16.5.1 提示句	539
16.1.7 てふ	531	16.5.2 成分の句化	541
16.1.8 など	531		

第17章 係り受け……………542

17.1 係り受け	542	17.4.1 首尾不照応	545
17.2 語句の並置	544	17.4.2 文の飛躍	546
17.3 語句の配置	545	17.4.3 係り先の消失	547
17.4 筆のそれ	545	17.4.4 連綿と続く文	548

第18章 敬語……………550

18.1 敬語の分類	550	18.4.5 関係規定性	592
18.2 敬語の位置	556	18.4.6 複合動詞の敬語形	594
18.3 主語尊敬語	556	18.4.7 敬語の重複	594
18.3.1 最高敬語	557	18.4.8 受身文・使役文の補語尊敬語形	595
18.3.2 形容詞・形容動詞の敬語形	560	18.5 準敬語	596
18.3.3 主語尊敬の敬語動詞	561	18.6 敬意の対象	596
18.3.3.1 存在・移動を表す敬語動詞	561	18.7 敬語の使用・不使用	598
18.3.3.2 授受を表す敬語動詞	564	18.7.1 敬語不使用の要因	598
18.3.3.3 発言を表す敬語動詞	566	18.7.2 身分差のある人々を一括して叙するとき	599
18.3.3.4 視聴を表す敬語動詞	568	18.8 副詞・接続詞・慣用句の敬語形	600
18.3.3.5 思考を表す敬語動詞	569	18.9 自卑敬語	601
18.3.3.6 衣食・乗車・就寝を表す敬語動詞	569	18.9.1 給ふる	601
18.3.3.7 その他の敬語動詞	571	18.9.2 まかる	604
18.3.4 複合動詞の敬語形	572	18.9.3 侍り	605
18.3.5 敬語の重複	573	18.9.4 つかはす	606
18.3.6 受身文・使役文の敬語形	574	18.9.5 申す	607
18.3.7 尊敬の「る」「らる」	576	18.9.6 主語尊敬語の自卑敬語用法	607
18.3.8 敬讓の助動詞「す・さす」(下二段)の単独使用	579	18.9.7 かしこまりの語法	608
18.3.9 敬語の命令形	579	18.9.8 侍りたうぶ	608
18.3.10 「給ふ」についての補足的事項	580	18.9.9 助動詞「しむ」による自卑敬語	609
18.3.11 尊敬の「す」(四段)	580	18.9.10 主語尊敬語「給ふ」と「給ふる」の混乱	610
18.4 補語尊敬語	581	18.10 候ふ	610
18.4.1 補語尊敬の補助動詞	582	18.11 名詞の敬語形	612
18.4.2 補語尊敬語はどの補語を敬うか	583	18.11.1 御	612
18.4.3 補語尊敬の最高敬語	584	18.11.1.1 「御」の位置	614
18.4.4 補語尊敬の敬語動詞	585	18.11.1.2 「御」の後の名詞の省略	614
18.4.4.1 移動を表す敬語動詞	585	18.11.1.3 「御」と述語動詞	615
18.4.4.2 授受を表す敬語動詞	586	18.11.1.4 用言に付く「御」	615
18.4.4.3 発言・視聴を表す敬語動詞	588	18.11.1.5 御…す	616
18.4.4.4 奉仕・動作を表す敬語動詞	591	18.11.2 敬語名詞	617
		18.11.3 「敬語名詞+あり／なる」	617
		18.12 自敬表現	618

第19章 談話……………620

19.1 ダイクシス動詞	620	19.3.4 モダリティ形式への承接	634
19.1.1 授受動詞	620	19.3.5 提示の「や」	635
19.1.2 移動動詞	621	19.4 省略・繰り返し	637
19.2 指示詞	622	19.4.1 省略	637
19.2.1 指示代名詞	622	19.4.2 言いさし	637
19.2.2 人称代名詞	626	19.4.3 黙説法	638
19.2.3 不定代名詞	627	19.4.1 繰り返し	639
19.2.4 指示副詞	628	19.5 接続詞・感動詞	639
19.3 終助詞	630	19.5.1 接続詞	639
19.3.1 情報系の終助詞	631	19.5.2 さるは	641
19.3.2 表出系の終助詞	632	19.5.3 感動詞	642
19.3.3 終助詞の構文的性質	633		

第20章 物語の文章……………644

20.1 物語の文章	644	20.6.1 景情一致の文章	651
20.2 移り詞	644	20.6.2 最終的な進退を先述する手法	652
20.3 和歌と散文の融合	648	20.6.3 和歌の修辞法の移入	653
20.4 心に沿った地の文	649	20.6.4 視点人物と場面	654
20.5 草子地	650		
20.6 物語の地の文の手法	651		

第21章 和歌の表現技法……………657

21.1 和歌	657	21.6 物名	672
21.2 枕詞・序詞	658	21.7 縁語・歌枕	673
21.2.1 枕詞	659	21.8 本歌取り	674
21.2.2 序詞	662	21.9 句切れ	677
21.3 掛詞	664	21.10 句割れ	679
21.3.1 2語の掛詞	664	21.11 句跨ぎ	679
21.3.2 3語の掛詞	666	21.12 倒置	680
21.3.3 異なる仮名の掛詞	666	21.13 句末	681
21.3.4 活用を異にする語の掛詞	668	21.14 破調	683
21.3.5 複雑な掛詞	668	21.14.1 字余り	683
21.3.6 掛詞による語の縮約	670	21.14.2 字足らず	685
21.3.7 同一語句の重複使用	671	21.15 折句・沓冠	686
21.4 三句めに位置する体言	671	21.16 畳句体	687
21.5 第二句と第五句の反復	672		

引用文献	689
用例出典一覧	698
あとがき	713
索引	717

第1章 序論

1.1 古典文法

単語は、文中で一定の規則にしたがって語形を変え、一定の規則にしたがって配列される。現代語で、

- (1) a 雨が降りそうだ。
 b 雨が降るそうだ。

の意味が違うのは、下線部の語形が(1a)と(1b)とで異なっているからである。「そうだ」が(1a)と同じ意味を表すとき、直上の語は(2a)のような形になり、(1b)と同じ意味を表すとき、直上の語は(2b)のような形になる。

- (2) a 咲きそうだ、起きそうだ、完成しそうだ
 b 咲くそうだ、起きるそうだ、完成するそうだ

(2a)の下線部の形、(2b)の下線部の形は、それぞれ共通した性質をもっている。例えば、「…ます」や「…はじめる」に続くときには(2a)の下線部の形が現れるし、「…と困る」や「…から」に続くときには(2b)の下線部の形が現れる。このような場合、それぞれの形に名前を付けておくと便利である。そこで、いま仮に、(2a)の下線部の形をA形、(2b)の下線部の形をB形と呼べば、(1)(2)の現象は、

- (3) 「そうだ」は、A形に付いたとき「今にも…すると見受けられる」の意味を表し、B形に付いたとき「…と聞いている」の意味を表す。

と一般化されることになる。

(3)のような説明には、(2)のようなりストアップにかかる負担がない、という点で大きな利点がある。(1)のような現象の説明として、(2)のように実例を並べあげるのではなく——実際すべてを並べ尽くすのはしばしば不可能である——、(3)のように一般化した説明を与えることは、言語現象に対する人知の勝利ともいべきことであろう。このように、単語の、文中における語形変化や、配列のしかたに一定の規則を見出し、一般化した形で述べたものを文法という。

なるを聞きながら、同じくは人悪からぬさまに見はてんと念ずるも苦
しう (源・藤裏葉)

(10) 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。(土佐)

◆次例では、伝聞表現が重複している。

- ・火鼠の皮といふなる物買ひておこせよ。(竹取)
- ・陸奥にありといふなる名取川 (古今 628)
- ・聞く人もあはれてふなる別れには (後撰 1395)
- ・宇治の平等院の宝蔵にぞあるなると聞く (古来風林抄)

◆次例は動詞「なる」に伝聞の「なり」の連体形が接続したものである。

- ・定めなくなるなる瓜のつら見ても立ちや寄りこむこまのすき者 (拾遺 558)

相手の話から判断したという意を表す例も少なくない。

- (11) 難きことどもにこそあなれ。この国にある物にもあらず。(竹取)
- (12) 人々、「海竜王の后になるべきいつき娘ななり。心高さ苦しや」とて笑ふ。(源・若紫)
- (13) 「尋ね聞こえまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思ひあはせつる」と [源氏ガ僧都ニ] 聞こえ給へば、[僧都ハ] うち笑ひて、「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。」(源・若紫)

(14)~(17)は嗅覚による推定の例、(18)は触覚(温度)による推定の例である。

- (14) 宰相の中將こそ参り給ふなれ。例の御匂ひいとしるく (堤・このついで)
- (15) 只今こそ自らの本の夫参るなれ。香ばしき香ゆ。(今昔 2-16)
- (16) たちばなの花こそいとどかをるなれ (建礼門院右京大夫集)
- (17) 宿ごとに花橘ぞ匂ふなる一木が末を風は吹けども (金葉 149)
- (18) 夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜やふけぬらむ行合ひの空 (新古今 282)

◆江戸時代以来、終止形接続の「なり」は詠嘆を表すと考えられ、推定伝聞を表すという理解が通説となったのはそう古いことではない。「なり」の表す意味が詠嘆か推定伝聞かという、いわゆる「なり」論争が起こったのは昭和30年代初頭のこと、昭和39年にも、例えば「推定伝聞の「ナリ」は承認できるか」という題の論文が書かれている。終止形接続の「なり」が推定伝聞の意であることを初めて明

らかにしたのは松尾捨治郎(1919)である。

◆高校生向け古典文法書17点の調査では、「なり」の意味を「伝聞推定」と表示するものが13点、「推定伝聞」と表示するものが3点、「推量」と表示するものが1点である(小田勝 2014b)。

7.2.3.2 推定伝聞の「なり」と断定「なり」との識別

終止形に接続した「なり」は推定伝聞を表す助動詞、連体形に接続した「なり」は断定を表す助動詞(判断辞)であるが、次例のように、終止形・連体形が同形の動詞に「なり」が付いた場合、推定伝聞であるのか断定であるのか、形の上からは区別できないことになる。

- (1) 野辺近く家居しせれば鶯の鳴くなる声は朝な朝な聞く(古今 16)
- (2) 障子を五寸ばかりあけて言ふなりけり。(枕 5)

活用語に付いた「なり」について、次のような判別基準があることが知られている(小松登美 1955、田島光平 1964、北原保雄 1967a、岡崎正継 1989、高山善行 2002、原まどか 2014)。以下、推定伝聞を「なり₁」、断定を「なり₂」と表示する。

- ①撥音便形に接続する「なり」は推定伝聞である。
 - ・「この野は盗人あなり₁」とて、火つけむとす。(伊勢 12)
- ②形容詞型活用語の本活用(「-き」)に接続する「なり」は断定、補助活用(カリ活用。「-かる/-かん」)に接続する「なり」は推定伝聞である。
 - ・かかる人は罪もおもかなり₁。(源・柏木)
 - ・宮の御心のいとつらきなり₂。(源・少女)
- ③未然形の「なら」は、ク語法形「ならく」は推定伝聞、それ以外はすべて断定である。
 - ・言ふなら₁く奈落の底に入りぬれば刹利も修陀もかはらざりけり(俊頼髓脳)
 - ・君はいづくにおはしますなら₂む。(源・空蟬)
 - ・心の通ふなら₂ば、いかにながめの空ももの忘れし侍らむ。(源・賢木)
 - ・参り給ひなば、また、さやうにあやしくてはあらせ奉るべきなら₂ず。(大鏡)

て、[朧月夜ハ]ほろほろとこぼれ出づれば(源・須磨)

(5) 風いと涼しく吹きて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。(源・桐壺)

(6) 入り方の月の端近きほど、とどめがたうものあはれなり。(源・夕霧)

次例では述語から「寝くたれ」(「寝乱れていること」の意の名詞)が、「寝くたれ髪」の意であることがわかる。

(7) 御寝くたれのはらはらと紛ふ筋なくこぼれかかれる御宿直姿のしどけなげなるに(白露)

詩歌では、故意に選択制限に違反した表現をすることがある。

(8) 篝火の影しるければうばたまの夜川の底は水も燃えけり(貫之集)

(9) 秋の月しのに宿かる影たけて小笹が原に露ふけにけり(新古今425)

(10) ほととぎす深き峰より出でにけり外山の裾に声の落ち来る(新古今218)

(11) 霜の上の朝明の煙絶え絶えにさびしさなびく遠近の宿(拾遺愚草)

(12) 雲凍る木末の空の夕月夜嵐にみかく影も寒けし(光厳院御集)

(13) むばたまの夜のみ降れる白雪は照る月影の積もるなりけり(後撰503)

(14) 明くる夜の雲に麓はうづもれて空にぞ積もる嶺の白雪(慕風愚吟集)

11.1.5 場所名詞・方向名詞

現代語では、移動動詞に係る二格は場所を表す名詞でなければならない。

(1) {大学/駅/名古屋/*ドア/*私/*田中さん}に行く。

したがって名詞「ドア」を「行く」の補語とする場合には、「ドアのところに行く」のように場所名詞化する必要がある。一方、古代語では次のような例がある。

(2) 女に行きてもの言はんと言ひければ(兼盛集・詞書)

(3) 新中納言、本妻に帰り給ひて(うつほ・国譲中)

(4) 少将の君に参でて、「しかじかなむ」と申しけるに(源・東屋)

(5) 泣く泣く尼上に参りて、かくと申すに(小夜衣)

(6) 法勝寺の門にて、馬に乗りぬ。(春の深山路)

「-がり」は名詞に付いて、名詞を「…のもとに(へ)」の意を含む方向名詞化する接尾辞である。移動動詞に対して、格助詞「に」「へ」を必要とせずに、格助詞のように用いられる。(10)の「思ふ」は準体言で「思ふ[人]」の意、(11)は「誰の所へ」の意。

(7) 昔、紀の有常がり行きたるに(伊勢38)

(8) 胸いたくいぶせければ、小侍従がり例の文やり給ふ。(源・若菜上)

(9) 妹らがり我が行く道の篠すき我し通はば靡け篠原(万1121)

(10) 逢ふことのかたのに今はなりぬれば思ふがりのみ行くにやあるらん(金葉502)

(11) 「誰がりおこせたるぞ」と問ひければ(伊勢集・詞書)

この「がり」は形式名詞としても用いられる。

(12) 家に咲きて侍りける撫子を人のがり遣はしける(拾遺132詞書)

(13) さしたることなくて人のがり行くは、よからぬことなり。(徒然170)

(14) 御通ひ路の中宿りなれば、それががり忍びておはしつ(白露)

「がり」が「…のもとより」の意を表すことはない。「-もと」は双方向で使われる。

(15) a 前中納言定家もとにつかはしける(続後撰1094詞書)

b 業平朝臣もとより、君に心をと言へりける返事に(続後撰694詞書)

11.1.6 情報名詞

現代語で、「聞く」の目的語は情報・音響に関する名詞でなければならない。

(1) {話/音楽/ラジオ/*都/*君}を聞く。

したがって名詞「都」を「聞く」の補語とする場合には、「都のことを聞く」のように情報名詞化する必要がある。一方、古代語では次のような例がある。特に(6)は、「言ふ」の主語が「妹」なのではなく、「妹のことなるべし」の意なので注意が必要である。

(2) ことの便りに都を聞けば(方丈記)(cf.「都のことを我に聞かせよ」後拾遺509)

(3) 何しかも波路へだてて君を聞くらん(拾遺482)

や残れる（四条宮下野集）〈「執」ト「集」ノ掛詞。詞書「我背きて後、大納言経長『金玉集』借り給ふとてあり」

歌語「海松布」は、必ず「見る目」と掛けられて用いられる。

- (19) 伊勢の海人の朝な夕なに潜くてふみるめに人を飽くよしもがな（古今683）

21.3.2 3語の掛詞

3語の掛詞の例をあげる。

- (1) うち捨てて君しいなばの露の身は消えぬばかりぞありとたのむな（後撰1310）〈「往なば・稲葉・因幡」
- (2) 津の国のこやとも人を言ふべきにひまこそなけれ蘆の八重葺き（後拾遺691）〈「昆陽・小屋・来や」〉〈類例、拾遺885〉
- (3) 忘るなよ忘ると聞かばみ熊野の浦の浜木綿うらみかさねん（後拾遺885）〈「浦・裏見・恨み」

21.3.3 異なる仮名の掛詞

掛詞では清濁の別は問題とされない。例えば、(1)は「嵐」と「あらじ」の掛詞、(2)「流れて」と「泣かれて」の掛詞、(3)は「見つ」と「水」の掛詞である。

- (1) とふ人も今はあらしの山風に入待つ虫の声ぞかなしき（拾遺205）
- (2) 冬川の上はこほれる我なれや下になかれて恋ひわたらん（古今591）
- (3) 町尻の君に文つかはしたりける返事に、「見つ」とのみありければ、つかはしける
泣き流す涙のいとど添ひぬればはかなきみつも袖濡らしけり（後撰764）

◆次例は、詞書に「家を売りてよめる」とあり、「瀬に」に「銭（ぜに）」という珍しいものが掛けられている。

・飛鳥川淵にもあらぬ我が宿も瀬に変はり行くものにぞありける（古今990）

- (4)(5)は「言ふ」と「木綿」「結ふ」、(6)は「言ふ」と「夕」との掛詞である。
(4) 榊葉にそのいふかひはなけれども神に心を掛けぬまぞなき（新古今

1887）

- (5) いつもただ神に頼みをゆふだすきかくるかひなき身をぞ恨むる（とはずがたり）
- (6) ふるさとにぬしやいづちと人間はばあづまの方をゆふぐれの月（秋篠月清集）

次例は、ハ行転呼（§1.4）の結果による、ハ行とワ・ア行の音の掛詞の例で、「荒鶉」と「洗ふ」とが掛けられている（なお「すみの江」の「すみ」は、「住み」と「墨」との掛詞）。

- (7) あらうと見れど黒き鳥かな
さもこそはすみの江ならめよとともに（金葉・補遺歌712）

同様に、次例は「木居」（鷹を留ませる木）と「恋」との掛詞である。

- (8) 我が身はとがへる鷹となりにけり年はふれどもこゐは忘れず（後拾遺661）
- (9) 御狩野のしばしの木居はさもあらばあれ背りはてぬるか矢形尾の鷹（詞花253）

次例の「お」は、「を（緒）」と「同じ」の「お」との掛詞。

- (10) 白糸のおなじ司にあらずとて思ひわくこそ苦しかりけれ（大斎院前の御集）

次例は、「見たらし」と「御手洗」の掛詞。

- (11) そら目をぞ君はみたらし河の水浅しや深しそれは我がは（拾遺534）
「流れて」に「永らへて」が掛けられる（あるいは響かせる）ことがある。
- (12) うきながら消ぬる泡ともなりなな流れてとだに頼まれぬ身は（古今827）
- (13) 「世の中の心にはなはぬ」など申しければ、「行く先頼もしき身にて、かかることあるまじ」と人の申し侍りければ
流れての世をも頼まず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば（後撰1115）
- (14) 懸想じ侍りける女の契りて侍りけるが、なくなりなければ、いと悲しくて、女のはらからのもとへ言ひやりける

流れてと契りしことは行く先の涙の上を言ふにざりける（仲文集）

次例は、上代特殊仮名遣いの異なる掛詞の例である。

- (15) をみなへし佐紀野に生ふる白つつじ知らぬこともて言はれし我が背
（万1905）〈「佐紀野」の「き（乙類）」と「咲き」の「き（甲類）」の掛詞〉
- (16) 春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ（万2453）〈「葛城山」の「き（乙類）」と「かづらく」の連用形「き（甲類）」の掛詞〉

21.3.4 活用を異にする語の掛詞

活用の種類を異にする語が掛けられることがある。次例(1)(2)は「吹く」（四段）と「更く」（下二段）との掛詞、(3)は「鳴る」（四段）と「馴る」（下二段）との掛詞、(4)は「射る」（上一段）と「入る」（四段）との掛詞である。

- (1) 雲も見ゆ風もふくれば荒くなるのどかなりつる月の光を（山家集）
- (2) 月影の初秋風とふけゆけば心づくしにもをこそ思へ（新古今381）
- (3) 須磨の海人の袖に吹きこす潮風のなるとはすれど手にもたまらず（新古今1117）
- (4) 照る月を弓張りとしもいふことは山べをさしていればなりけり（大和132）

21.3.5 複雑な掛詞

次例(1)の「ならず扇」は「鳴らして手馴らした扇」の意、(2)は「帰らぬ鶴を待つ〔間に〕松も枯れぬる」の意である。

- (1) うたたねの朝けの袖にかはるなりならず扇の秋の初風（新古今308）
- (2) むかし見し宿も野山に荒れまして帰らぬ鶴をまつも枯れぬる（うつほ・国譲中）

次例は複雑で、「来ぬ人を」は遠く「松虫」の「松」の部分の「待つ」に係るので（「来ぬ人を秋のけしきや更けぬらむ。」という文は成立しない）、一首の意は「来ぬ人を〔待つに〕秋のけしきや更けぬらむ。〔来ぬ故の〕恨みによわる松虫の声」のようになる。

- (3) 来ぬ人を秋のけしきや更けぬらむ恨みによわる松虫の声（新古今1321）

次例は、「世を憂しと思ふ身には、海辺に海松藻が少ないように、あなたを見る機会も少ない」の意である。

- (4) おほかたは我が名もみたと漕ぎ出でなむ世をうみべたにみるめ少なし（古今669）

次例は、「三笠山ふた葉の松の千代のけしきを、いかばかり神もうれしと見[るらん]」の意で、円環的である。

- (5) いかばかり神もうれしとみ笠山ふた葉の松の千代のけしきを（金葉322）

次例は掛詞「正木の葛」の部分^{かづら}が、倒置で上の「散るか」に係る。

- (6) 移りゆく雲に嵐の声すなり散るか正木の葛城の山（新古今561）

次例は、掛詞多用の歌の例。

- (7) 我を君難波の浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき（古今973）

「難波の浦」と「何は」^{うきめ}「憂」、^{うきめ}「浮海布」と「憂き目」、^{うきめ}「御津」と「三津」と「見つ」、^{うきめ}「海人」と「尼」を掛け、歌意は「私のことをあなたは何とも思って下さらずつれなくなさったので、^{うきめ}浮海布を刈る^{みつ}御津の^{あま}漁師ではありませんが、^{うきめ}憂き目に^{あま}であって三津寺の尼になってしまいました。」（ちくま学芸文庫訳）のようになる。

語の一部を掛詞にする場合、〔動詞+助動詞〕のうちの一部分が表されないことがあるので、注意が必要である。例えば、

- (8) ひとめ見し人は誰とも白雲のうはの空なる恋もするかな（千載647）

の「白雲」の「しら」には「知らず」の「しら」が掛けられている。このような場合、「しら」から「知らず」を復元しなければならない。ただし、「しら」が必ず「しらず」になるとは限らず、(9)では「知らざりし」、(10)では「知らる」が掛けられている。

- (9) なれなれて見しはなごりの春ぞともなど白川の花の下蔭（新古今1456）

- (10) 雪ならばまがきにのみは積もらじと思ひとくにぞ白菊の花（千載348）

(11)の「いは」には「言はじ」が、(12)の「いは」には「言はむ」が、(13)の「き」には「来たらむ」が、(14)の「御墓山」の「み」には「見ず」が掛けられてい

索引

1. 術語・事項は現代仮名遣い、古典語の語彙は歴史的仮名遣いの五十音順に配列した（例えば、「申す」は「まうす」、「参る」は「まゐる」で引く）。
2. 「一」は直上の項の下位分類であることを示す。
3. 項目前の「*」は、存在しない語形、文法的に容認されない語形であることを示す。
4. 項目中の「+」は語句を隔てず接する意を、「…」は語句を隔てて後方の意を示す（項目中の「+」「…」は読まずに配列した）。
5. 「⇒」は「を見よ」、「→」は「をも見よ」の意を示す。

- あ**
- 飽かず 164
 飽く 49
 悪し 284
 悪しくす 112
 アスペクト 105,121-123, 140-143
 遊ばさる 571-572
 遊ばす 571-572
 あたはず 111
 あたら 17,335
 あな(+形容詞/形容動詞語幹) 90,263-264
 一(+形容詞終止形+や) 264
 一(+名詞) 90
 一(+名詞+や) 89-90
 あなかま 264
 あはれ 16
 あひだ 509
 逢ふ 400
 扇をさし隠す 375
 あへず 111
- あまた 17,165,335
 浴(あ)む 46
 危(あや)ぶむ 47
 あらず 55-56,161
 あらぬ 161
 あらばこそ 160-161
 あらる(あり+る) 102, 578
 あり 29,55,57-58,80-81, 133-136,159-161
 一(使役態) 113
 一(+動詞) 141
 *ありたぶ 564
 ありぬ 133-134
 あれな 226
 あれや 260-261
 *あれり 139
- い**
- い(副助詞) 418-419
 言いさし 637-638
 イ音便 39,274-275
 意外性 153
 いかで 112,234-235,242
- いかなれや 261
 いかに 249
 いかにとがな 242
 いく度(たび)となく 169
 いさ 308
 いざ 223
 いし(い+し) 419
 意志 112,220-222,244
 意志動詞 48-49
 異主語省略構文 402
 已然形終止 92-93,682
 已然形による接続表現 495-497
 已然形+や 259-261
 いたく 306,309
 1人称 176,184,191,193, 220,282,552,620,625, 627
 いづこの 333-334
 いつしかも…む 235
 いづち 399
 いと 306,318
 一(…ず) 165
 移動動詞 139-140,386,

仏足石歌体 657
 物名(ぶつめい) 672-673
 不定語 241,253,321
 一(…命令形) 253
 一(+も) 253
 不定代名詞 627-628
 筆のそれ 545-548
 不必要 219
 分説 425,431
 文法化 126 →逆文法化
 分裂文 428
 へ
 へ 367,386-387
 並立(並置) 51-52,282-
 283,360-363,387,544-
 545,614
 並立助詞 361-363
 べかし 182
 べからし 182-183
 べからず 72,179,181,232
 べからまし 73
 べかりけむ 73
 べかりつ 72
 *べかりぬべし 74
 べかるらむ 73
 べくて(べし+て) 77
 べくはあらず 179
 べくもあらず 179
 べし 75,105,175-179,
 219-220,222,224-225,
 513,634-635
 一(接続の違例) 179
 一の否定 179-181
 への 333
 べらなり 181-182
 変化の結果 376,387
 変化の実現 128

ほ

方がいい ⇒事態選択
 方向名詞 314-315,399
 法助動詞 175
 放任法 228-229
 補語 10
 補語尊敬語 550-553,555-
 556,581-595
 一(敬語動詞) 585-591
 一の敬意の対象 583-584
 補充疑問文 248-252
 一(多重) 251
 補助形容詞 55-56
 補助動詞 54-55,103-104,
 438
 補助用言 54-56
 ほどこそあれ 508
 ほどに 511
 ほに 511
 補文標識 15,349
 本歌取り 674-676
 本説取り 676-677

ま

申さず 588
 申さる 578
 まうし(助動詞) 238
 申し言ふ 590
 申し給ふ 580
 申す 25,553,580,582,
 588-593,607
 まうづ 585
 まうで来 604-605
 まうのぼる 586
 前置き 493,504
 まかづ 585-586,604-605
 まかり出づ 585

まかる 554,585,604
 まくに 353
 まくほし 235-236
 枕詞 658-662
 まさふ 563
 まし 145,175-176,204-
 216,254
 一(希望を表す) 214-215
 一(準体言の) 205
 一(ためらいを表す) 208,
 215
 一(単独の) 213-216
 一(「む」と同意) 215-216
 一(連体修飾の) 205
 まじ 175-177,179-181,
 219,221-222,232
 一(接続の違例) 181
 ましかど 77
 ましかば 204,206-212,
 239-240
 一(…感嘆文) 212
 一(…き) 211-212
 一(…疑問文) 212
 一(…けむ) 211
 一(…けり) 212
 一(…じ) 211
 一(…断定) 212
 一(…反語) 212
 一(…べし) 210
 一(…まし) 204
 一(…まじ) 211
 一(…む) 211
 まじからむ 73,175
 まじからむずらむ 175
 まじかりき 73
 まじかりけむ 73
 まじかりつ 73
 *まじかるべし 74

まじくとも 77
 まじげなり 180
 ましじ 180
 ましとき…まし 209
 ましに…まし 209
 *まじばかり 409
 ましまさふ 563
 まします 562
 ましものを 214-215
 ましも…まし 209
 ましやうに 213
 ましよりは 212-213
 ます 561-562
 ませば…べし 210-211
 ませば…まし 204
 待ち遠に 294-295
 まつる(補助動詞) 582
 まで 403-404,407,409-
 411,414
 まで思ふ(見る) 535
 までに 410
 までも 416,474-475
 までもなし 411
 学ぶ 36
 まに 511
 まにまに 511
 まほし 234-237,244
 まほしからず 73,238
 まほしからむ 73
 まほしかりき 73,236
 まほしかりけり 73
 まほしかりつ 72
 *まほしくとも 77
 ままに 511
 まものうし 238-239
 迷い 254
 まれ(も+あれ) 22
 参らす 24,582-584,586

参る 569-570,585-586,
 604
 ま惜し 239

み

み 512-517
 一(+思ふ) 516
 一(述語) 517
 一(+す) 516
 一(…み) 502-503
 一(連体修飾) 517
 一(連用修飾) 516-517
 み(名詞化) 319
 ミ語法 278,512-517
 一(+係助詞) 436
 みそなはず 568
 みそなふ 568
 皆 365
 みながら 485
 みまそがり 563
 身身 359
 みゆ(助動詞) 185
 行幸(みゆき) 617
 未来(未実現) 155-156,
 193,199

む

む(助動詞) 123,144-
 145,155-156,175-177,
 193-194,220-221,223-
 224,235,254-255,351-
 352,634-635
 一(仮定条件節を作る)
 467-468
 一の非表示 144-145,221
 む(接尾辞) 18,38
 無意志動詞 48-49
 一の禁止形 230

一の不可能態 107
 一の命令形 228
 *むかな 635
 むからに 461,474
 報ゆ 35
 無助詞 367,398-402
 一(被使役者) 114
 むず 24,195-197
 一(和歌中の) 196
 結びの省略 444-445
 結びの流れ 439-444,454
 むずらむ 196
 無相の語 17
 無題文 425
 むとす 195-196
 一の敬語形 556
 *むとも(む+とも) 77
 むに 376,467-468
 むは 467-468
 むは…まし 210
 むはや(む+はや) 195
 むめり(む+めり) 191
 むや 224-225
 め
 名詞 12,311-366,398-402
 →形式名詞
 一(する人の意) 312-313
 一(+と+名詞) 66
 一(+や) 89-90
 一の換喩的使用 312-313
 一の並置 360-363
 一の列挙 363
 名詞化 318-319
 名詞述語文 78-82
 命令 223-228
 命令形 125,224,226-229
 一(敬語の) 579